

霊宝伝だより

題字・畚野光義師

霊宝館だより 第127号

平成30年7月10日発行
和歌山県伊都郡高野町高野山3006
公益財団法人高野山文化財保存会
高野山霊宝館
電話 0736-561-2029
URL <http://www.reihokan.or.jp>

利用案内

■開館時間
5月1日～10月31日
8時30分～17時30分
11月1日～4月30日
8時30分～17時00分

■休館日
年末年始のみ

■拝観料 大人 600円
高・大学生 350円
小・中学生 250円
高野町に住民票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。

■専用駐車場あり



武田二十四将図 成慶院(部分) 大宝蔵展で通期展示
赤い衣を羽織る武田信玄の右には弟の信康(追討野)、信玄の下の若い武将は信子の勝頼。更にその下の扇を持つ「武蔵高兵衛」は後の真田昌幸です。

第39回大宝蔵展 「高野山の名宝 “もののふ”と高野山」 7月14日(土)～10月8日(月)・祝

第127号 目次

- 大宝蔵展のご案内……………2～3
- 収蔵品の紹介100……………4
- 高野山の古建築 第三十一回……………5
- 高野山の考古学(十九)……………6～7
- 古絵図で巡る高野山探訪(その八)……………8～9
- 高野山の文書(十四)……………10
- 高野山霊宝館からのご案内……………11
- 霊宝館の庭園44……………12

毎月21日(弘法大師の日) ご来館の方にプレゼントあり! ホームページ割引券もご利用ください

第39回大宝蔵展

「高野山の名宝」ものものふと高野山



無畏十力吼菩薩像〔後期〕



金剛吼菩薩像〔前期〕



竜王吼菩薩像〔後期〕

国宝 五大力菩薩像 有志八幡講

平成30年7月14日(土)～10月8日(月)祝まで

前期 平成30年7月14日(土)～9月2日(日)

後期 平成30年9月4日(火)～10月8日(月)祝

会期中無休

武士の読み方の一つに「ものものふ」があります。武士の歴史は、古くは平安時代から始まり、江戸時代まで続いています。戦国時代には多くの戦国武将が全国各地で戦を行っていました。その戦国武将と高野山内の各寺院とは師檀契約というものを結び、深い関係がありました。そのため、高野山には全国各地の戦国武将の供養塔があり、ゆかりのある文化財が数多く伝わっています。今回の展覧会では、高野山に伝わる戦国武将をはじめとする「ものものふ」のゆかりの品を国宝、重要文化財を中心に展示します。

主な展示品

■絵画

国宝 五大力菩薩像(金剛吼・竜王吼・無畏十力吼)

有志八幡講〔期間中展示替あり〕

重文 五大力菩薩像(金剛吼・竜王吼・無畏十力吼・雷電吼・無量力吼)

普賢院〔期間中展示替あり〕

重文 浅井長政夫人像

持明院

重文 武田信玄像

成慶院

〔前期〕



重要美術品 太閤秀吉像
蓮華定院〔後期〕



重文 浅井長政夫人像（お市の方）
持明院



重文 武田信玄像 長谷川信春（等伯）筆 成慶院〔前期〕



国宝 続宝簡集38 豊臣秀吉朱印状
金剛峯寺

- 重美 大閤秀吉像 蓮華定院〔後期〕
- 重文 毘沙門天像 光台院〔前期〕
- 重文 阿弥陀如来像 成福院〔後期〕

- 書跡 続宝簡集37 織田信長朱印状 金剛峯寺
- 国宝 続宝簡集38 豊臣秀吉朱印状 金剛峯寺
- 国宝 紺紙金銀字一切経（中尊寺経） 金剛峯寺

- 県指定 真田幸村書状 蓮華定院〔期間中展示替あり〕
- 県指定 文禄三年連歌懐紙 安養院

- 彫刻 未指定 伝・徳川家康像 金剛峯寺
- 未指定 厨子入弁財天十五童子像 成慶院

- 工芸 未指定 丸頭巾形兜（武田信玄所持） 成慶院
- 未指定 五鈷鈴（松虫鈴 伝・武田信玄奉納）
- 未指定 太刀（正宗 伝・真田幸村所持） 蓮華定院
- 未指定 轡・付属鏈（真田昌幸所持） 蓮華定院
- 未指定 唐縫打敷（島津家久奉納） 金剛峯寺

※期間中、展示替えを行います。
※文化財の保存上、展示品が替わる場合があります。

○ミュージアムトーク
（学芸員による展示解説）

8月21日（火）、9月8日（土）
いずれも13時30分より 約60分間

※予約不要、参加費無料（要拝観料）

○ミュージアム法話

（お坊さんによる法話と展示解説）
7月21日（土）、8月4日（土）、8月18日（土）、
9月15日（土）
いずれも13時より 約45分間

次回予告

秋期企画展
「“香り”の荘厳」
平成30年10月13日（土）～
平成31年1月14日（月）・（祝）

収蔵品の紹介 100

丸頭巾形兜

武田信玄所持 一頭

鉄製黒漆塗 桃山時代（十六世紀） 成慶院蔵
周七八・五cm 径三〇・三cm 高一八・〇cm

戦勝の願いが込められた兜



前立 裏面



眉庇 裏側より



参考：頭形兜
伝真田信繁所持 蓮華定院蔵

武田信玄（一五二一〜七三三）の兜、というと鬼の顔の前立まえたてに白い毛で覆われた「諏訪すわ法性ほつしやうの兜」をイメージする方が多いかと思ひます。本品はそれとは異なるタイプの兜ですが、『紀伊国名所図会 三編』（天保九年「一八三八」刊行）には前立の無い状態での挿図が載せられ、

また『紀伊続風土記』（天保十年「一八三九」完成）にも成慶院什宝として「武田信玄兜」が記載されるなど、江戸時代後期にはその存在はよく知られていたようです。

現在この兜に付属する円盤形の前立は、木製で金地に黒で武田家の菱紋があらわされ、裏面には墨でトンボの絵が描かれています。トンボは武士・武将に好まれた生き物で、前にしか飛ばず後退しない、また空中で獲物を捕らえるなど、その勇ましさから「勝虫かちむし」と呼ばれ、武器の意匠によく用いられました。この前立にも勝虫のように勇ましく、また「勝」をもたらしようという願いを込めて描かれたのでしよう。

この兜の名称についてですが、以前より当館では「頭形兜かぶと」と呼ばれていましたが、頭頂部が鏡餅のように平たく丸い形で、真田信繁（幸村）所持とされる頭形兜（蓮華定院蔵）とは随分形が異なります。調べてみますと、実際には「丸頭巾形兜」と呼ばれる形式で、還暦祝いの時に被る赤い頭巾や、大黒様おおくろさまが被っている頭巾（このため大黒頭巾とも呼ばれます）と同

種の「丸頭巾」をかたどっています。全体的に黒く、無骨な雰囲気ですが、鉦部分かねぶの板をつなぐ紐は、当初はもつと鮮やかな緑色だったとみられ、また額部分の黒い眉庇まげしは、裏には全面に朱漆が塗られており、見えない部分への武士のこだわりを感じます。

成慶院は武田家菩提寺として知られ、信玄やその子勝頼、信玄の弟信廉（逍遙軒）、徳川家康の五男で武田姓を継いだ武田満千代（信吉、一五八三〜一六〇三）ら武田家ゆかりの品が数多く伝わっており、この兜はその一つです。

（福形安希子）

「収蔵品の紹介」は今回で連載一〇〇回を迎えました。昭和五十七年（一九八二）の創刊号より執筆者を交代しつつ、「靈宝館だより」では最長の連載コーナーとなつていきます。今後も展示キャプションには収まりきれない、文化財の魅力を掘り下げて紹介したいと思ひます。

連載

高野山の古建築
第三十一回 真別処 円通律寺

鳴海 祥博



山門の全景 楼門という形式だが、下層は漆喰壁で覆われている。俗に「竜宮門」といわれるが、屋根の形が特異で、修行僧の「網代笠」のようだ。



境界石 鬱蒼とした道の左右に立つ。右は「大界外相」とある。ここから先は聖なる空間、俗人は入れない、という意味。真言寺院には珍しい境界石だ。



求聞持堂 本堂の裏に建つ小さな土蔵で、小窓が一つあるだけ。この中で100日間に100万回真言を唱える修行が行われるという。俗人には想像を絶する世界だ。



境内の全景 左が本堂、右が客殿台所。本堂は規模が大きく、正面には唐破風の付いた間口三間の向拝が付く。高野山内の寺院の中でも最大規模の本堂である。

円通律寺は江戸時代初め、茨城県牛久の大名山口重政公が、対馬から良永律師を迎えて、律院の僧堂として中興されたものです。「律」という名のとおり、厳格に戒律を守り、今でも「事相講伝所」という本山直轄の修行道場として、部外者の立ち入りは厳しく禁じられています。本尊は重要文化財の釈迦如来坐像で、一年に一回、旧暦四月

八日の釈迦の誕生日にだけ、一般の者にも境内への立ち入りと本尊の参拝が許されています。今回その貴重な機会に見学できたので紹介しましょう。まず目に付くのは風変わりな姿の山門です。二層になっていますが下の部分は漆喰壁で丸く塗り込められています。このような姿の門は「竜宮門」と俗称されています。丸い起り屋根の形が修行僧のかぶる「網代笠」に似ているからでしょうか。天保九年（一八三八）に刊行された『紀伊国名所図会』にも現在と同じような姿の門が描かれています。その頃既に建てられていたと思われる。高野山内の寺院との違いを強烈に意識したような造形です。

山門を入ると正面に本堂、右手に客殿台所があります。本堂には唐破風の付いた間口三間の向拝が付いています。三間の向拝は、高野山では壇上伽藍の金堂と奥之院の燈籠堂だけで、特異な例です。向拝は本来参拝者の礼拝する空間のはずですが、一般の人の入らない道場でこのような大きな向拝が付いているのは何故なのか。

八葉の峰に囲まれた高野山内から、南の峰を越えた山中に真別処円通律寺があります。鬱蒼とした山道を進むと左右に石碑が立っています。左には「不許葷酒入山門」とあります。葷や葱などの臭いのきつい食べ物と酒は持ち込み禁止、という意味です。右手は草書体で「大界外相」と刻まれています。聞き慣れない言葉ですが、聖俗の境を示し、ここから先は俗人は入れないという意味で、主に律宗寺院で用いられる境界石です。

山門を入ると正面に本堂、右手に客殿台所があります。本堂には唐破風の付いた間口三間の向拝が付いています。三間の向拝は、高野山では壇上伽藍の金堂と奥之院の燈籠堂だけで、特異な例です。向拝は本来参拝者の礼拝する空間のはずですが、一般の人の入らない道場でこのような大きな向拝が付いているのは何故なのか。

のでしょう。かつては修行僧であふれるような状況だったのでしょうか。本堂の規模の大きさに比べ、客殿台所は極めて質素で小規模です。しかしそこには中門と大広間、持仏の間、そして左奥には庭に面した二部屋続きの床の間のある座敷があつて、その構成は山内寺院の客殿と全く同じです。違うのは座敷が上段の間のように豪華に飾られていないこと、規模が小さいことでしょう。これはこの円通律寺が信者さんを迎えるためではなく、お坊さん自らが修行する場所だからなのでしょう。そしてもう一つ「求聞持堂」という小さなお堂も見逃せません。これは土蔵造りで、この中で百日間に百万回真言を唱えるという、お大師さまが若い時に四国室戸岬の洞窟で行った修行の行われるお堂です。小さな蔵の中での修行は、俗人には想像を絶するものです。厳しい修行の世界を垣間見た思いでした。来年二〇一九年の旧暦四月八日の釈迦誕生祭は五月一二日だとのこと。次の機会に是非お参りされては如何でしょうか。

石塔の銘文を読む①

公益財団法人 元興寺文化財研究所

狭川 真一

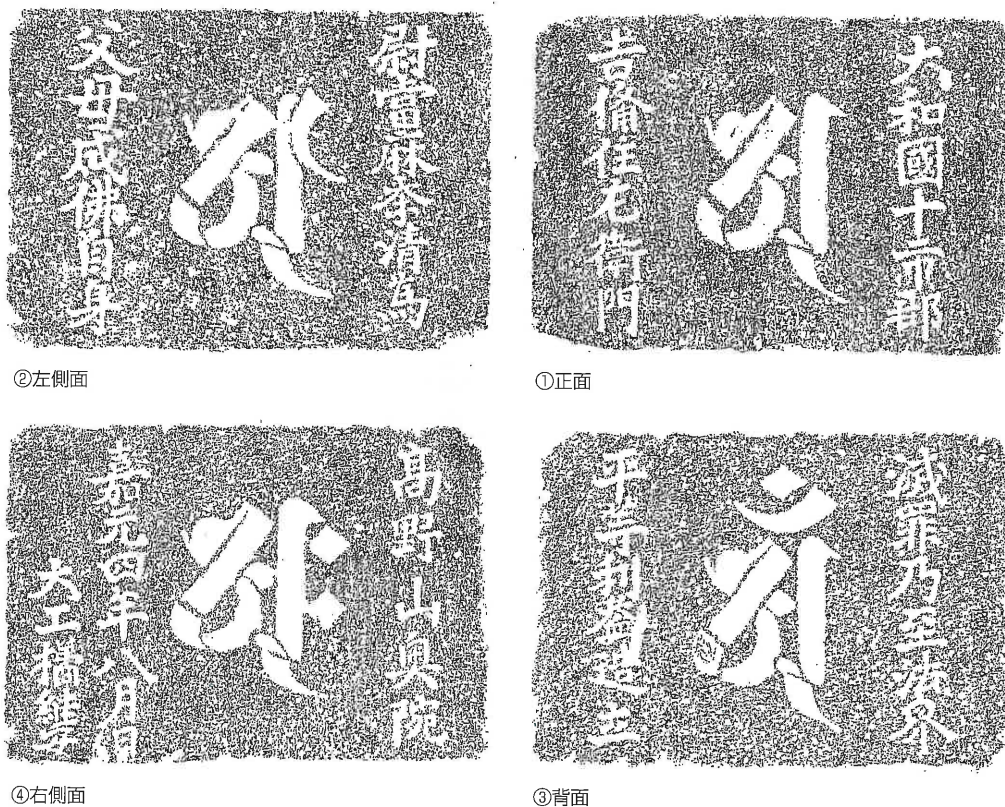


図1 橘維安五輪塔拓影

今回からしばらくは、石塔に刻まれた銘文の意味するところをご紹介します。最初に奥之院燈籠堂の改築工事中に見つけた、五輪塔の地輪とその銘文を眺めてみましょう。

五輪塔の情報

出土した五輪塔(写真1・図1)は、地輪と呼ぶ基礎のような部分が残っていますが、幅四〇、五センチ、高さ二八、二センチで、上面の中央に直径一五、三センチ、深さ一七、七センチの納骨用と思われる穴が穿たれています。納骨穴入口の周囲には、幅一、五センチ、高さ一、一センチの縁取りが施されています。また、地輪の上面は外に向かつて緩やかに傾斜していて、納骨穴の周囲の縁取りとともに、内部に雨水が浸入しないよう工夫されています。

銘文は地輪側面の四面にまたがって記載されていますが、各面の中央には大きな梵字が配置されています。梵字は葉研彫りという断面の形が三角形になる彫り方で、五大種子と言われる五輪塔に最も多い真言の一部分を表わしています。

銘文を読む

銘文は地輪の四面に配置され、正面向左側面、背面、右側面へと順に展開し、「大和国十市郡／吉備住左衛門」「尉當麻季清為／父母成佛自身」「滅罪乃至法界／平等利益立」「高野山奥院／嘉元四年八月日／大工橘維安」／改行、「」は改面と読めます。現代語にすると、「大和国十市郡吉備(奈良県桜井市吉備)の住人、左衛門尉の當麻季清が、父母の成仏と自身の滅罪、さらにこ



写真2 京都府木津川市弘長二年銘藪の中三体磨崖仏



写真1 橋維安五輪塔

の世界のすべての人々に功德が及ぶことを願って高野山奥之院に造立するものである。嘉元四年(一三〇六)八月日。(この塔を製作した)石大工は、橋維安これやすである」となります。少ない文字数ながら読み取れる事

象は多いのですが、ここでは石大工の橋維安について紹介します。

石大工の橋維安

高野山で石大工の名前を刻んだ石

塔類は、近世の大名墓にいくつも見られるのですが、中世の資料となるとこの石塔が唯一です。石造物に製作者の名前を残す習慣は、鎌倉時代前期の東大寺復興に伴って渡来した、中国人石工の伊行末いぎょうすえあたりから増えてきます。その子孫は伊派石工いはいしとして名作を残しますが、彼らと同時期に活躍したこの橋



写真3 京都府木津川市西福寺 永仁三年銘笠塔婆

氏も複数の作品を残しています。橋氏最古の作例は、京都府木津川市加茂町東小にある藪の中三体磨崖仏(弘長二年/一二六二・写真2)で、維安の先祖の安繩やすなわが、小工平貞末たいらさだすえを従えたチームで製作にあたっていました。しっかりと工房を構えていたのでしょうか。

安繩の次に登場するのが友安ともやすで、一二八五年から一二九八年までの間に六基の石造物が知られています。その中には京都府木津川市加茂町西明寺にある大型の笠塔婆(永仁三年/一二九五・写真3)や奈良県大和郡山市郡山城の石垣に転用されて基礎部材のみになっている宝篋印塔(永仁六年/一二九八)などが知られています。この宝篋印塔は復元すると三メートル以上になると予想されるもので、巨大な石造物を造立できた腕の良い職人であつたと思われま

す。この二人の作品は京都府と奈良県に集中していますが、京都府の例はすべて南山城地域です。現在の奈良市を中心にその周辺部が活躍の拠点であつたと思われま

す。彼になつてはじめて和歌山県に作例が知られますが、銘文を見ますとその施主は奈良の住人であり、石材も高野山ではマインナーな花崗岩(主流は砂岩)です。奈良で製作した石塔を高野山へ運び込んだと思われま

す。高野山の石造物は、古くは京都から運ばれたものが多いことを以前に紹介しました(一一九号)が、高野山で砂岩製の石塔造立が盛んになつた鎌倉時代末期であるにも関わらず、奈良から石塔を運び込んでいます。父母の遺骨を高野山奥之院へ納骨したいという當麻季清の厚い想いが伝わってくるのですが、さらに自分たち所縁ゆかりの石を使い、地元の石工が作った石塔へ納骨することにこだわつたようです。季清は様々な想いを抱いて、はるか奈良の桜井から高野山奥之院を目指したのでしよう。

※人名の読み方は推定です。

【参考文献】

- 愛甲昇寛一九七九「高野山の五輪塔」
- 『元興寺文化財研究所年報』創立一〇周年記念論文集一「元興寺文化財研究所」
- 佐藤聖二二〇〇七「中世的石塔の成立と定着」『墓と葬送の中世』高志書院

「古絵図で巡る高野山探訪」 (その八)

奥之院―墓地②

前号では、平安時代、高野山は弘法大師空海が入定されている聖地として認められていたため、皇族や公家といった貴族が参詣し、また末法

思想の影響を受けて奥之院に経塚が造営されたことをお話しました。本号では、その後についてお話します。

平安貴族の参詣

奥之院は空海の入定留身の聖地（弘法大師信仰）、また釈迦が入滅後、五十六億七千万年後に弥勒菩薩が現れて、とても有り難い説法を聞かせてくださり（弥勒下生信仰）、空海も共に現れられる聖地と説かれました（図1）。

それにより、高野山は、弥勒菩薩の下生の時を待つ憧れの地として広く知られるようになり、納骨の聖地として幕開けを迎えます。

燈籠堂付近では、中国の宋時代（十一～十三世紀）の青磁の四耳壺や水注が蔵骨器として用いられ、

埋納されました。これらの蔵骨器は、当時日本と中国の間で行われていた日宋貿易で輸入された高級品ばかりであることから、納骨されていた被葬者は皇族や公家のような貴族らであったと考えられます（図2～4）。また、興味深いことにこのような青磁の蔵骨器は、大門の発掘調査でも出土しています。このことは、平安時代、既に奥之院だけでなく、高野山の全域が納骨の霊場として認識されたことを示しています。



図1 「高野山絵図」(奥之院部分) 江戸時代(18世紀) 西南院



図2 奥之院に蔵骨器として奉安された青磁四耳壺と白磁四耳壺の出土状況



図4 青磁水注(蔵骨器) 奥之院燈籠堂出土 中国宋時代(11-13世紀)



図3 白磁四耳壺(蔵骨器) 奥之院燈籠堂出土 中国南宋時代(12-13世紀)

納骨信仰の普及

その後、高野山では十三世紀中頃に五輪塔が出現します。五輪塔とは、空輪、風輪、火輪、水輪、地輪から成り、全体で五大、宇宙や自然、またその象徴である大日如来を表しています。当初のものは組合せ式のものでしたが(図5)、十五世紀中頃になると、小型の一石五輪塔が登場し、十七世紀前半くらいまで盛行します(図6)。

また一方で、貴族らから始まった納骨の習俗は十四世紀に入ると庶民層まで広がっていきます。そのことは、高価な蔵骨器ばかりではなく、



図6 一石五輪塔 江戸時代(17世紀)



図5 組合せ式五輪塔 奥之院燈籠堂出土 鎌倉時代(13世紀)

土師器や瓦器などの日常雑器や小型の多様な器種の蔵骨器が奥之院燈籠堂の地下から多数出土していることからわかります(図7・8)。

地下に埋められた? 中世墓地

奥之院には、小型の一石五輪塔が大きな杉の根元などに祀られています。奥之院の墓地の発掘調査では、地上からは想像もできないほど多数の一石五輪塔が地下から出土します(図9)。

また、埋まっていた土層を観察す



図7 瓦器小壺(蔵骨器) 奥之院燈籠堂出土 鎌倉時代(13-14世紀)



図8 金銅製蔵骨器 奥之院燈籠堂出土 鎌倉時代(13世紀)



図9 奥之院弥勒堂(みろく石) 東側での発掘調査で出土した中世墓地 (写真提供: 高野町教育委員会)

ると、その土は風雨によって自然に堆積したのではなく、人為的に盛土をして新たに墓地を造成しているように見受けられます。恐らく、私たちが現在、目にする武将や大名らの巨大な五輪塔を有する墓地は、高野山の子院(塔頭)が各地の武将や大名らと「師檀契約」を結び、彼らの先祖や自身の石塔を作るために、

古い時期の中世墓地を盛土造成して築かれている可能性があります(図10・11)。

何度も奥之院にご参拝された方があると思いますが、現在と過去との相違に思いを馳せ、訪れるのも、いつもと違う奥之院を楽しめるのでお勧めです。

(鳥羽正剛)



図10 奥之院に奉安されている崇源夫人五輪塔(一番石塔(一番碑)・お江の墓) 全高6.6m 寛永4年(1627) 建立

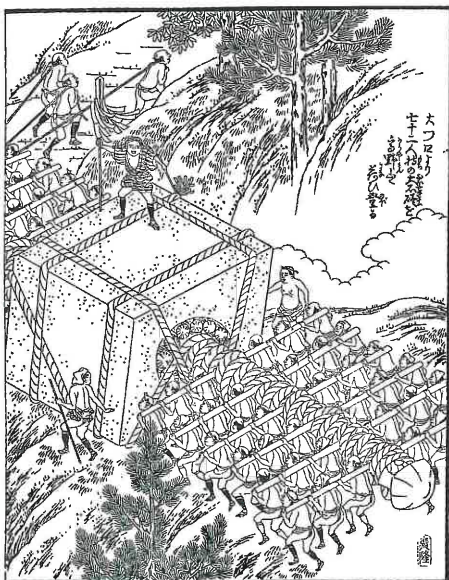


図11 『紀伊国名所図会』 文化8年(1811)~嘉永4年(1851)刊 高野山町石道を通り、一番石塔(一番碑)を運ぶ様子

高野山の文書 (十四)

織田信長朱印状について

戦国時代に活躍した武将のうち最も有名な武将は、織田信長(一五三四～八二)でしょう。そこで今回は、天正八年(一五八〇)九月に信長が高野山に宛てた「織田信長朱印状」(国宝『続宝簡集』巻三十七 金剛峯寺蔵)を紹介します。

この文書を要約すると、大和国宇智郡(原文では有智郡、現在の奈良県五條市の周辺)を、高野山が領有することを承認する。しかし、もしよくない行動や態度を示したならば、承認を取り消すので特に忠節を尽くすように。」という内容になります。宇智郡は、弘法大師空海が高野山開創の際に、二匹の犬を連れて狩場明神に出会い、高野山へと導かれたという説話がある、高野山ゆかりの土地なので、承認されたことは喜ばしいことです。しかし、文面からは信長が高野山に対して尊大な態度で接してきていることも読み取れます。この文書の出された時には、武田信玄や上杉謙信はすでに亡く、石山本願寺も滅びていました。天下をほぼ手中にした信長としては当然の態度といえますが、実は、文書の内容だけでなく、文書の形式からも信長の態度が読み取れるのです。

まず、画像の書状を見てみると、紙の上半分に文字が集中していることがわかります。よく見ると、真ん中に折れ線が入っています。これは一枚の紙を真ん中で折って用いる形式で、折紙といえます。折紙は、軽い内容や目下の人に宛てる略式の形式で、ここから信長の高野山に対して、自らの権威を誇示しようとする態度が読み取れます。

の相手には花押が用いられました。信長も花押と朱印を併用していましたが、天下人としての地位が安定すると、他の大名への文書にも朱印を用いました。これは、信長が自分を他の大名たちより上の存在であると示したものとされています。つまり、この文書では高野山より信長が上だという態度を示しているのです。(ちなみに、朱印は有名な「天下布武」の印であり、これは武力をもって天下を統一しようという信長の意志が表れています。)このように文書の形式を見ても、信長が高野山に対して天下人として尊大な態度で接していることがわかるのです。

〔翻刻文〕
大和國有智郡
事如近年充
行候訖全可進
退自然不儀之
子細有之者可悔
還候條別而可抽
忠節事專一候也
天正八

九月廿一日 信長(朱印)
金剛峯寺惣中



織田信長朱印状



朱印「天下布武」

次に注目するのは、日付の下に捺された朱印です。朱印は文書の出し手を確定するものです。戦国時代以前は、花押(サイン)が主流でしたが、戦国時代には朱印が広まりました。もっとも、花押と朱印では、花押の方がより厚礼で、朱印はもっぱら領内向けの文書に用いられ、対等以上

信長と高野山は良好な関係になりましたが、やがて関係は悪化します。天正九年(一五八一)、ついに信長は高野山を攻撃しますが、本能寺の変で頓挫します。危機を脱した高野山でしたが、天正十三年(一五八五)、豊臣秀吉に降伏、天下人に屈することになりました。(研谷昌志)

※第三十九回大宝蔵展では今回紹介した「織田信長朱印状」を展示します。

高野山霊宝館からのご案内

各種イベント報告

◎国宝 仏涅槃図(金剛峯寺蔵)
愛知県立芸術大学による現状
模写作品奉納式

・4月13日(金) 於本館紫雲殿

奉納式には金剛峯寺と愛知県立芸術大学関係者が出席し、ご法楽のち絵本山金剛峯寺 添田宗務総長による感謝状・記念品の贈呈が行われました。

模写図は金剛峯寺に奉納され当館で保管、7月8日(日)まで展示されました。今後は不定期に公開する予定です。



愛知県立芸術大学 岡田眞治教授による目録の奉納

◎重要文化財 四天王立像 修理へ

5月28日より四天王立像(平安時代、金剛峯寺蔵)四躯の修理が始まりました。修理の完了は2020年

3月を予定しております。



四天王立像のうち 増長天

◎ミュージアム法話 開催中

「ミュージアム法話(お坊さんによる法話と展示解説)」、今年も好評です。

今後の開催予定

7月21日(土)／8月4日(土)

8月18日(土)／9月15日(土)

10月20日(土)

※参加費無料、要拝観料。いずれも13時より。予定は変更する場合があります。



5月12日 ミュージアム法話のようす

◎宝物展示情報

◎東京国立博物館

本館第2室 国宝室展示(予定)

平成30年10月30日(火)～11月25日(日)
国宝 宝簡集 巻第二(源頼朝書状含む) 金剛峯寺蔵

※東京国立博物館寄託品

◎霊宝館整備事業報告

◎照明設備工事完了

今年1月中旬の新館に続き、4月上旬に本館(紫雲殿・南廊・隅廊・玄関・廊下)の照明器具取り替え工事が完了しました。LED照明となったことで、光や熱による文化財の劣化を抑え、また調光の幅が広がり、以前とは違う雰囲気展览展示となりました。

◎新収蔵品の報告

平成30年2月に地藏菩薩像ほか絵画計8件、阿毗曇経ほか書跡計5件、大和州益田池碑名卷子問道舶来袋が釈迦文院より収蔵されました。また同年3月に和歌山県指定文化財「金剛峯寺境内出土の地鎮・鎮壇具」のうち金剛三昧院出土品が金剛三昧院より収蔵されました。これらは今後、当館で管理・保管されます。展示予定は未定です。

◎敷地内樹木伐採と整備

昨年度に続き、霊宝館西側の樹木の間伐を5月中旬に行い、明るく、風通しがよくなりました。収蔵庫の屋根に接触の危険がある木の撤去も

◎友の会会員募集

高野山霊宝館では友の会会員を随時募集しております。

- ・会員証提示で会員本人のほか同伴者3名様まで霊宝館と金堂・大塔の拝観無料
- ・年4回発行の機関誌「霊宝館だより」送付

〈年会費〉

- 一般会員(個人) 3,000円
 - 賛助会員(法人) 30,000円
- 皆様のご入会をお待ちしております。

〈お問い合わせ先・申込先〉

高野山霊宝館 霊宝館友の会係
(電話0736-56-2029)

併せて行いました。今後は空いた場所に石楠花の植樹を行う予定です。

◎新館階段修復

今年のお大雪により破損しておりました、新館入口の外付け階段の修復が5月下旬～6月中旬にかけて行われました。

ブナ・樺 そばのき・稜の木

元高野山高等学校長 亀岡 弘昭

ブナはブナ科・ブナ属の落葉高木です。

ブナ科の樹は日本ではブナ属、コナラ属、クリ属、シイ属、マテバシイ属の五属二十二種が自生しているといわれています。

それらのうち高野山ではブナ属―ブナ・イヌブナ、コナラ属―クヌギ・カシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワ・アカガシ・ツクバネガシ・アラカシ・ウラジロガシ・シラカシ、クリ属―クリの十三種の自生が確認されています。



幹と葉枝

なお、ブナ科の樹の多くは里山の樹として、器具材、薪炭材、椎茸の榾木などとして、かつては日常生活で常用されていました。どんぐり(団栗)とも呼ばれる堅果は古代人の食糧となりました。

ところがブナは、北海道から本州、四国、九州に分布、北海道では低地平地にも生えますが、東北以西では青森県と秋田県の県境の白神山地(白神岳の標高・一二三五メートル)の世界最大級のブナ林として世界自然遺産に指定されているものをはじめ、四国の剣山や石鎚山脈、日本の分布南限とされている鹿児島県の高隈山のブナ林など、多くは山地の高所にあります。

和歌山県下では、高野山から龍神村に通じるスカイラインの途中、護摩壇山(標高・一三七二メートル)付近の斜面で見(観)られます。

この樹は高野山の植物垂直分布上も貴重な存在です。往時はブナ林もあつたのではと思われます。

このように、ブナ林やブナの自生地は人里を離れた山地にあり、この樹の材は堅いが、くるいが大きいうえ腐りが早いなどの欠点があり、用途が少なく、自然林(天然林)として残されてきました。が、戦後の高度経済成長期にブルドーザーやチェーンソーなどの開発、防腐法の研究などにより壁用合板、床材、パルプ材などとして、各地で大掛かりな伐採が急速に行われました。

現在は、ブナ林が比較的肥沃な地に形成されるため、水源涵養林、緑のダムとしても見直されています。

炒って試食してみました。香ばしくて美味でした。



三つの稜のある種子

古名、別称、方言名には、そばのき(稜の木・蕎麦木)、しろぶな(白樺)、ほんぶな(本樺)、そばぐり(稜栗)、そばぐるみ(稜胡桃)などがあります。

秋の銅赤色の紅葉も奇麗です。